
三人揃えば平気なの？

f j 野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三人揃えば平気なの？

【Nコード】

N2867BA

【作者名】

fj野

【あらすじ】

とある馬鹿な三人が
Fate/zeroの世界観を
爆発させません。嘘だけど

00 自己紹介

自己紹介

立花 春日

（タチバナ カスガ）

15歳の女の子。

180近い身長なのが
かなりの傷になっているよ
一目見て男子と言われると
タツクルを食らわせて来る
んだけど、それが凄い
破壊力なんだよ。
シヨートに一房だけ長い
髪の毛がね
トレードマークだよ。

秋葉 夏

（アキバ ナツ）

15歳の女の子。

155で身長が止まって
カルシウムと寝言で
言うほど傷を負っているよ
チビって言う目潰しを
するよ、威力が高いよ。
シヨートカットに前髪を

上げないと貞子と
呼ばれるよ

奏 光

（カナデ ヒカリ）

15歳の女の子だよ。

160の身長に不満を

抱く腹黒な子だよ

ポニーテールを王道と

ツインテールを邪道と

謎な定理を持つ

眼鏡ちゃんだよ。

怒ると般若様が降臨するよ

とても怖いよ

んにゃ、三人は

オリジナルで作りました。

頑張った。

ギャグが高いかも。

余談に三人は

同じ高校だよ。

01 遠坂邸にて

冬木市にある遠坂邸

そこには、居候である

三人の馬鹿がいた

もう、誰にも止められない

馬鹿、馬鹿が！

「聖敗戦争つてなんだぬ、
はなはな？」

今、はなはなこと立花春日に
お馬鹿なクエスチョンを
出したのは秋葉 夏。

学校でも担任を悩ます馬鹿
である。

「戦争つて重火器ばんばん
勝ち抜き大会やる、光？」

御丁寧とは言いがたいが
今、夏に返答をしたのは
春日である。

かなり怖い返答が
返ってきた。

彼女は、自分を馬鹿とは
認めないお馬鹿様である。

「違う、聖杯、聖杯。
願望機と呼ばれてて、
聖杯の導きにより
令呪を貰った魔術師による
死闘。

たった一人の願いしか
叶えないケチ機械。」

聖敗を聖杯と直し、
願望機と説明したのは良い
だが、その願望機とケチと
彼女が最後のお馬鹿様。
無自覚馬鹿である。
一番質が悪いのである。

言う。

「へー、それを魔術師が
競うんだぬ！ぬはははーい」

やっと理解したらしい。

「でさ、話は変わってさ
なんでぐるんぐるん
してるん？」

「言峰綺礼って人可哀想」

「親父どもに囲まれて
ぬはははははは！」

三人は、二階の柵から

見下ろしていた

その頃下では

「あの馬鹿達」

頭を抱える遠坂家、
当主の時臣。

「　　凄い人達ですね。
彼女達が私の姉弟子ですか？」

真顔で聞く言峰綺礼が
いた。

（ぬはは！話終わったかぬ）

（時臣！暇や、暇、暇、暇）

（滑稽だったぞ、馬鹿臣。）

（君達は、何がしたいの）

（（（時臣弄り！）））

（弟子ではなさそうですね）

02 召喚

ついに遠坂邸で召喚の儀式が行われた。時臣に届いたのは蛇の脱皮の化石

「来れ、天秤の守り手よ」
時臣の声がドア越しに聞こえる。

「儀式始まったぬん。」

「なんのサーヴァントが来るんやろか？」

「アサシンは、綺礼だもんね」

皆で想像中

：

「夏は、ランサーだぬん」

「ウチは、アーチャーやな」

「私は、キャスター」

皆違う回答。

「皆はどうしてそれを選んだんや？」

「そこにあつた魔導書を引き千切つて何がいいか丁度良い場所にペンがあつたから目を隠して選んだぬーん」

「私は、馬鹿臣の性格を考えに考え抜き、娘を桜ちゃんを売った奴なら此れが来ると」

「へえ、そうなん。
私は、なんかそんな感じがしたからやなあ」

「君達。何時の間にそんなことをしてたの。」

「「「あ、おかえり馬鹿臣」」」

「君達。もつとましな歓迎の仕方はないの？
そして夏、光は後でたつぷりと説教だ」

召喚も終わったのであろう
時臣が召喚していた

部屋から出ていた。

「うるせえよ、馬鹿臣
召喚したサーヴァントの
位置は？キャスターなら
ざまあみる馬鹿鹿って
言ってやるからさ。」

「さつきからなんだぬん。
金色の粉が邪魔だぬん！」

時臣は待つてましたと
言わんばかりに目を輝かせた

「我々が儀式により
召喚をしたサーヴァントは
古代最古の王だ。
我々の勝利だ！
そして位はアーチャーだ
残念だったな。」

「当たったやん！
やったわー＼（ハ－ハ）／」

「惜しかったぬーん」

「馬鹿臣の癖につ」

光は、悔しそうに

夏は、これから始まる
説教に

春日は、当たった嬉しさで
色んな反応をしていたが
3人は一斉に固まることと
なる。

「早速仕事だ。
英雄王の世話を頼みたい
退屈させないようにな」

「「「え 嫌」」」

「ならば説教だ。今回は
綺礼からのだな。」

「「「丁重にお預かりする」」」

かくして、3人は無事
英雄王の世話することと
なった。

（この我が空気だと）
（申し訳御座いません、
英雄王）グリグリ
（痛い、こめかみ痛いっ！）
（あほ臣、痛いぬーん！！）
（おもしろいわ！）

03 初めまして、英雄王！

心配だから偵察をしてくれ
我がマスターが

言っていたから偵察を

してい るのですが

英雄王、ギルガメツシュに
早速会うつと

「 なんや、この金ピカ」

「私に言われても 困る」

「お兄さんが粉を
撒き散らしていたんだぬん」

会ってそうそう

失礼な態度を取りました。
彼女等は、

逝きたいようです

ハサンの記録より抜粋

「我は、古代最古の英雄、
ギルガメツシュである。」

「 ギルガメツシュって
デニツシュみたいな
名前だぬっ むぐうっ」

「黙つとき！死にたいんか
逝きたいんか！？」

早速、馬鹿丸出し。

オロオロしています。

英雄王のツボに

入ったようですね。

爆笑しています。

「貴様等のような雑種
実に我の寵愛を ぶはっ」

腹を抱えて

笑いだした英雄王。

早速気に入ったようです。

死ななくて良かったです

「そのメソポタミアって
とこの王だったぬん」

「その威圧感の意味が
解った気がしたわ」

「ふーん、長い名前だね」

「貴様等、面白い！
名を呼ぶことを許そう」

「わーい、ギルギルだぬん」

「普通にギルガメツシュやわ」

「ギルガメツシュって呼ぶ」

気に入られると

早いんですね、ふむ。

夏さんの馬鹿ぶりには

英雄王も珍しいものを見る
目付きでした。

「暇だからUNOで
遊ぶぬん！」

「ほお、偉いぞ雑種！」

「負けたらえげつない
罰ゲーム付きや!!」

「負けるものか！」

えげつない？

一体どんな罰ゲーム

なのでしょう？

恥ずかしながらハサンめは
気になります。

「ギルギル、16枚カード
引くんだぬん」

「折角1枚になったのに、

春日、夏、光！貴様等！」

「王様も弱いやん！ははは」

「いけない、春日があがる」

「させるか、雑種！」

白熱しているようです。

あの英雄王もカードには弱いみたいです。

それにしても、ゲームとなるとあの3人は強い。

「ふはははは！勝ったぞ！」

「勝ったぬぐん！」

「春日、残念ね。」

「マジ無いわー！罰ゲームなんやの！」

「間桐さん家の蟲が入った箱に手入れるぬん」

「え！？」

「残念だったな春日。」

「蟲に食われる。うえ。」

私も嫌です。

夏は、何を考えているのか
解りません。

ある意味それ何処から
仕入れたのですか？

蟲蔵にあるはずですが

（嫌や！）

（ぬんぬん）

ズボツ

（あゝあゝあゝ！？）

（雑種の考えることは
恐ろしい）

（夏は、馬鹿だけど
ゲームは天才なんだ）

（えげつないな）

（綺礼様、彼女が怖いです）

04 立花春日とセイバー陣

「買い物に行ってきた
くれないか。」

この時臣の一言から

立花 春日の一日は始まった

「実は、王が鍋が食べたい
と言つてな、食材を
買つてきて欲しいんだよ」

「何で、私だけやねん。

夏や光もあるやんかー！」

「夏は部屋から出てこないし
光に関しては嫌の一言でな」

「つまり、余った最後、か」

「そう言うことだ。
宜しく頼むよ。」

つてな訳でスーパーに
いる訳だが

何で、セイバー陣営が
呑気に買い物してるん？

「アイリスフィール、

お肉が食べたいです！
後、この松坂牛、ヒレ肉に
このササミも！！！！」

「あらあら、良く食べるわね
セイバーったら」

「まだ、食べ足りません、
戦に備えて もももも」

「セイバー！試食品は
逃げていかないわよ！！」

なんか、平和やな。
さて、肉も買わなあかんか
嫌でも会ってまうわ
んー、でもどないしょ

「ももももも ん！
貴方は、さつきから
ちらちらと此方を見ますね
まさか、このお肉を！！」

「へ？！違う、違うんや！
うん、ああああ
其処にあるお肉を！
取りに行こうと思てな！」

なんか、苦し紛れの言い訳
みたいやな

相手は、騎士王やし

私、死んだ、フラグ立った

「あら、セイバー 私達
邪魔だったみたいよ？」

あれり？

「あ、失礼しました。
此れですか？アメリカ産の
198円のお肉。」

「あ、それや！うんうん、
ありがとー！助かったわ」

私の命も。

「さて、そろそろお会計ね
お財布 あ。」

「どうしましたか、
アイリスフィール？」

ん、何が起きたんやろ？
乗り掛かった船や、
見に行こか。心配やし

「お財布忘れちゃった、
えへへへ」

「アイリスフィール!？」

我慢できなくって。

「どないするん？」

「「あ。」」

「すみません、
助かりました」

「本当にご免なさいね
いつか、返すわ!」

「ええんよ。馬鹿臣の
お金やし!」

奢りました。
仕方無いじゃないか。
可哀想だったんだもの
しかも、道のりも一緒
私の方が近いみたいやけど

「本当にありがとう」

「ご迷惑をかけました」

「いいんよ、あ 着いた」

時間がたつのは早いものや
あつという間やったもの。

「ほな、また〜」

「またねー!」

「お金はいつか返します」

また、会えると良いなあ
うんうん。

（アイリスフィール!）

（何、セイバー?）

（彼女が入って行った家
遠坂です!）

（え?! 令呪無かったわよ!?）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2867ba/>

三人揃えば平気なの？

2012年1月8日21時53分発行